酒器 08

「幻の古陶」珠洲焼の黒の系譜を受け継ぎ現代に活かす

珠洲焼（すずやき） 二本松窯（にほんまつがま）

石川県珠洲市

珠洲焼は、12世紀後半から15世紀末にかけて能登半島の先端・珠洲郡内（現在の珠洲市周辺）で作られた中世を代表する焼物です。14世紀には日本列島の四分の一に広がるほど隆盛を極めましたが、戦国時代に忽然と姿を消しました。以来、「幻の古陶」とよばれてきた珠洲焼ですが、わずかに残された断片からその姿が明らかになるにつれ、素朴で力強い美しさが人々の心を魅了し、約400年の時を経て再び発祥の地によみがえりました。

よみがえった珠洲焼が放つ、深い黒の輝きや手仕事ならではのあたたかみ、謎に満ちた存在そのものが人々の心を捉え、再興以来、珠洲焼に情熱を注ぐ現代の陶工たちが誕生。遥か昔に、この地で陶器づくり一筋に生きた古の陶工たちの魂を受け継ぎ、新たな珠洲焼の歴史を刻んでいます。

珠洲焼は、古墳時代中期に大陸から伝わった須恵器（すえき）の流れを汲んでいるといわれています。鉄分を含む珠洲の土を用い、大きな物は粘土紐を積み上げながら形を整え、叩き締めて素地の強度を高めるという技法による作品が多い。現代でもその技術を用い、中物や小物はロクロ挽きで作ることが多い。1,200°C以上の高温で焼き締め、窯焚きの後半では酸素不足の炎で、独特の「燻べ焼き（くすべやき）」という方法で焼き上げます。釉薬（うわぐすり）を使わず、薪の灰が高温で溶けて自然の釉薬となります。数日間の焼成で、素地もよく焼き締まって水漏れを防ぐ。燻べ焼き（炭化焼成）により、黒灰色の渋い艶を醸し出します。

Experience program

珠洲焼の器作り体験／珠洲の土を使ってカップや茶碗など小さな器を作る。 ※最大4名まで。焼成後の作品送料は別途。海外送付は対応不可

料金／粘土1kg使用 3,500円